

## 【(6) 児童生徒の反応に対する対応】

### ④「授業を妨げる言動に対してはその子に応じた注意をしている」

#### 《つまずきの背景》

Ｌ セルフモニタリングの困難さ、M 自己コントロールの困難さ、Q 状況理解の困難さ

#### 《解説》

授業中に発問を最後まで聞かず勝手に答えてしまったり、他の子どもが発表をしているときに話に割り込んだりしてしまう子どもがいます。

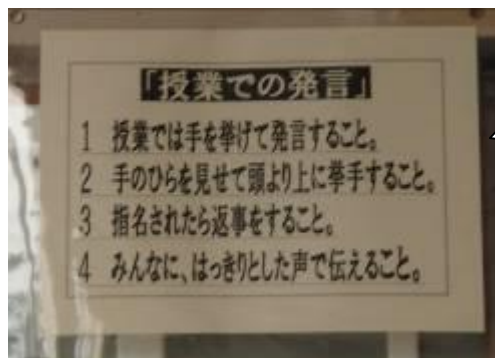
その子はもしかすると、「挙手をして指名されてから発言する」というルールが分かっていないか、あるいは忘れているのかもしれませんが、また、自分の行動や欲求をコントロールすることや、自分の言動が周囲にどのような影響を与えているかを客観的に振り返ることが難しかったり、「暗黙の了解」が理解できていないために、その場にふさわしい行動を取れなかったりすることがあります。発言内容によっては、授業に参加していることや発言の意欲があることを認めてから、適切な行動の仕方を伝えます。発言や発表について学級全体でルールを作り、視覚的にも確認できるように教室内に掲示しておくことも一つの方法です。不適切な発言等があった場合には、反応せず、掲示してある「ルール」を指差すことで子どもが自分の言動を振り返ることができます。

言葉だけで注意をするよりも、マークを提示したり、適切な行動のモデルを示したりする方が分かりやすい場合もあります。

#### 【工夫点】

- ・ルールに沿った行動を取ったときには褒める。(小)
- ・「読む」「書く」「聞く」「座る」などの言葉をカードにし、必要に応じて提示する。(小)
- ・発言の仕方を掲示する。(小中 工夫例 46)
- ・ストップマークを提示する。(小 工夫例 47)

#### ◆工夫例 46 「発言の仕方を掲示する」



#### 《中学校》

視覚的な手掛かりがあると、自分の行動をコントロールしやすくなります。言葉で注意すると授業の流れが中断してしまうことがありますが、このようにルールを掲示しておく、黙って指差すだけで伝えることができます。

#### ◆工夫例 47 「ストップマークを提示する」



#### 《小学校》

私語が止まらない場合には、このようなストップマークを示すと、言葉で注意するより分かりやすくなります。教師が手に持って振ることで、不注意傾向のある子どもも注目しやすくなります。